

UR

UR都市機構の情報誌 [ユーアルプレス]

PRESS

2012

vol.31

「特集」食を通じた

人のつながり

「巻頭インタビュー」

石井ふく子

私のドラマの中心に
食卓があるわけ



——— 街に、ルネッサンス ———



UR

UR都市機構



みんなで止めよう温暖化

「UR都市機構」チーム・マイナス6%

C O N T E N T S

- 1 特集
**食を通じた
人のつながり**
- 3 [巻頭インタビュー]
私のドラマの中心に食卓があるわけ
石井ふく子さん
- 7 SCENE 1 〈武里団地〉
巨大団地に飛び込んだ学生が
作り出した新しい食卓
- 13 SCENE 2 〈たまむすびテラス〉
食のつながりが生み出す
新しい団地再生のかたち
- 15 SCENE 3
時代とともに変わるキッチン
PART 1 DKの誕生
PART 2 進化するDK
PART 3 URのリニューアル
- 19 文豪の愛した街
司馬遼太郎 [大阪市・東大阪市]
- 21 クロスワードパズル&プレゼント
- 22 URからのお知らせ
宮城県牡鹿郡女川町・東松島市
復興まちづくり事業が着工

表紙は昭和30年代の香里団地(大阪府枚方市)の食卓の様子

季刊「ユアールプレス」
vol.31 (2012年 12月)

発行 独立行政法人都市再生機構
〒231-8315
神奈川県横浜市中区本町6-50-1
横浜アイランドタワー
Tel. 045-650-0881 / Fax.045-650-0889

編集・制作 I&S BBDO
デザイン ボールドグラフィック
印刷 大日本印刷

※1・2ページの写真はイメージです(写真:的野弘路)

[特集]

食を通じた人のつながり

食卓を囲む団らんには家族の絆を深め、人生を豊かなものにしてくれる。ただ、生活サイクルの変化や核家族化の進行で、伝統的な食卓の風景は徐々に減りつつある。そうした中、家族に限らず様々な人が集う、食を通じた新しいつながりも生まれてきた。人と人とを結びつける食の意義を考える。



いいい ふくこ
1926年生まれ。50年に日本電建宣
伝部入社。61年にTBSに引き抜き
を受け入社。テレビプロデューサーと
して「肝っ玉かあさん」「ありがとう」な
ど多数のホームドラマをヒットさせる。
脚本家の橋田壽賀子氏とコンビを組
む「渡る世間は鬼ばかり」は20年に
も及ぶ長寿番組となった。著書に
「お蔭さまで」（世界文化社）、「ありが
とう またね…」(廣済堂出版)など。



50年以上もの間、テレビプロデューサーとして
第二線でドラマ作りに携わってきた石井ふく子さん。
ホームドラマの母とも称される石井さんが、
「家族のつながりの中心点」と考える
食卓について話をうかがった。

写真：大槻純一
取材：文：宇治有美子

石井ふく子

「巻頭インタビュー」
私のドラマの中心に食卓があるわけ

Fukuko Ishii



2011年、惜しまれながらシ
リーズの幕を下ろした人気ドラマ
『渡る世間は鬼ばかり』が、201
2年9月に2週連続のスペシャル
ドラマとして復活し、大きな反響
を呼んだ。ドラマが復活したのは
シリーズ終了後、視聴者から続編
への強いリクエストが数多く寄せ
られたからだという。

大吉、節子夫婦と5人の娘から
なる岡倉家を中心にして物語が紡
がれる、ホームドラマ『渡る世間は
鬼ばかり』の誕生は1990年。娘
たちの嫁ぎ先での姑や小姑との確
執、夫婦の離婚危機、子どもの受験
戦争といったさまざまな悩みやト
ラブルを抱える日常と、そんな娘
たちを心配しながら見守る父と母
の愛情を描くストーリーは、多く
の人々の共感を呼び、お茶の間で
絶大な人気を博した。

22年間で、10シリーズ。ホームド
ラマとしては異例の金字塔を打ち
立てたこのドラマで、家族が時に
ぶつかり合い、また時に喜びを分
かち合う喜怒哀楽の共有の場とし
て重要な役割を担ってきたのが、
家族が囲む食卓だ。

を吐露し合う。食卓はいわば、家
族のつながりの中心点です。これ
は、ドラマのなかだけに限らず、ど
の家族にもいえるのではないで
しょうか。

● **ともに食事する食卓での時間が
家族のつながりを深める**

—— 家族がそろうって食卓を囲む
ことが、大切なですね。

石井 毎朝、「おはようございま
す」と挨拶を交わしながら家族全
員が食卓につく。互いの顔色を見る
だけで、「今日は元気がないけれど、
何か悩みがあるのかな」「顔色が悪
いけれど、具合が悪いのかな」と
いったことにおのずと気がきます。

また、ダイニングにいながら、母
親が料理をする姿を見ていると、
包丁を持つ姿勢や野菜を刻むリス
ムなどから、母親の体の変化に気
づくこともできます。家族が互い
のことを思いやる気持ちは、そう
した日々の積み重ねから生まれる
のではないかと思うのです。

—— 食卓に集うことが、家族の絆
を強くする？

石井 ええ、そう思います。ドラマ
の撮影でも、食事をするシーンが

● **大人気ホームドラマの中心には
いつも食卓シーンがあった**

—— 石井さんのプロデュースす
るドラマでは、家庭を取り巻く問
題が、登場する各家族を通して描
かれています。これらのテーマを
取り上げ、メッセージを発信する
ためにはどのような工夫があるの
でしょうか。

石井 私が作るドラマの中心には
いつも食卓があります。それは、食
卓が家族のつながりを深めるため
に、とても大切な役割を果たす場
所だと考えるからです。食卓を囲
み、同じものを食べるということ
は、家族の絆が深まっていくとい
うことではないでしょうか。

ドラマのなかでも、やはり食卓
の存在を重要視しています。私は
これまで、家の中で起こるさまざ
まなサスペンスを描こうとドラマ
作りをしてきましたが、家族の集
まる場所がなければ、おのおのが
抱える問題を皆で話す機会が作れ
ません。

悩みや愚痴、うれしかった出来
事まで、食卓に家族がそれぞれ
テーマを持ち寄って、互いの思い
あると空気がやわらぎますが、一
緒にものを食べるという行為は、
相手との距離を縮める作用がある
と思うんです。食べながら話して
いると、不思議と相手の気持ちが
分かる気がしますね？

私は、俳優さんに手作りのおに
ぎりを持っていくんですよ。出演
者は休憩時間が限られています
が、おにぎりなら手軽に食べても
らえる。作るのは手間になりませ
んし、現場の雰囲気も和み皆元氣
になりますからね。

『渡る世間は鬼ばかり』では、食
卓を囲む意義を描いた象徴的な
シーンがあります。長山藍子さん
扮する岡倉家の長女・弥生の嫁ぎ
先、野田家には、実の息子と離婚し
た義娘やその子どもなどが暮ら
し、全く血のつながりのない人々
が一緒に食事をとっているのです。

女性たちが順番に当番になって
料理を作り、食事の時間には皆が
一堂に集まってくる。そんな野田
家のダイニングは、昔ながらの大
家族を思わせる空間です。疑似家
族が、食卓を囲んで同じものを食
べるうちに、だんだん一つの家族
になっていく様子から、家族が食



Fukuko Ishii

「家族は、食卓に集い語り合うことで互いに成長する。ドラマでも、そのような日常を大切に描いています」

ぶ台を囲みました。しかしこの食事スタイルは、現代では非日常へと変化しているということでしょうね。

——食卓を彩る小道具にも、変化があるのでしょうか？

石井 もちろん、そうです。台所用品には、とくに時代が表れるものだと思います。新しい台所用品を知っておくために、私は意識してデパートの家庭用品売り場を歩くようにしているんです。最近では、例えば電子レンジだけで料理ができる調理器具など、どんどん便利になっていきますよね。

便利な調理器具を使うか、使わないか。母親はいやだといひ、若い

卓を囲む意義深さを感じとっていただけのではないのでしょうか。食卓の在り方はどのように変化してきたと思われませんか？

石井 『ただいま1人』（1964年）『肝っ玉かあさん』（1968年）といった作品に携わっていた頃と比べると、変わりましたね。当時のドラマでは、朝夕問わず、食事の時間には、大黒柱の父親を中心に、母親、祖父母、子どもたちが集う姿があったものです。ところが昨今は、大家族が一堂に集うようなシーンは、珍しくなりました。

父親は仕事で忙しくて帰ってこない。食事も一緒にいる日がほとんどないのが現状です。そんな日が続くと、食卓に父親の姿がないことが日常になっていきますよね。家族のなかに父親の居場所がないといわれるようになって久しいですが、これは家族とともに

娘は新しいものは便利だから使いたいという。そうした何気ないやりとりがドラマのワンシーンになるんですよ。

——調理グッズだけでなく、惣菜を買って並べるなど、食事の仕方も随分変わりました。

石井 子どもは、自分の母親が作ったものは一番おいしいと思うて育つものではないでしょうか。その思い出が親子両方に幸せな思い出としてインプットされていくわけですね。

デパ地下の食品が充実し、いかにして簡単に食事をとろうか、という考え方が、現代の風潮になっていますよね。誰かのために料理をしてあげたいという心がなくなっているのをとても重く受け止めています。

ドラマの制作現場では、プロの料理人に指導をいただきながら食事のシーンを描いています。素材の選定から調理方法、盛り付けに至るまで、作り手の心を丁寧に映し出したいのです。

機械化が進んで、物が豊かになったけれど、それとは逆に心は貧しくなっていく。文化と文明が

食事をする機会が少なくなり、父親と家族のつながりが希薄になってしまったことも一因のような気がしています。

ちやぶ台からテーブルへ 食卓空間も変遷してきた

——30〜40年前から今日まで、ドラマのなかの食卓には、どのような変化がありましたか？

石井 昭和から平成へ時代が移り変わるとともに、食卓のある空間自体にも変遷が見られました。最大の変化といえば、生活様式が和から洋へ、また食卓のある部屋が畳の間から洋間になったことでしょうか。今は、多くの家庭でフローリングのフロアにダイニングテーブルが置かれていますよね。

私がドラマを作るときには、今も必ず食卓のシーンを入れていますが、日常の食事はやはりダイニングテーブルを使っています。今回の『渡る世間は鬼ばかり』のスペシャルドラマでは岡倉家の家族が集まって食事をするシーンがありました。こちらは特別な日ということで、畳の間で座卓を囲んだ。昭和の中頃までは畳の部屋でちや

逆行しているのを感じます。その結果、家族のバランスも崩れてきている。ドラマのなかでそうした問題を提起していきたいという気持ちもありますね。

ドラマを通じて家族の関係を育むためのヒントを提示したい

——今後ドラマを通じて、どのような食卓の在り方をメッセージとして伝えていきたいと思われませんか？

石井 理想を言えば、朝だけと言わず、夜も家族が食卓に集まって時間を過ごしてほしい。個々の社会ができていますから、なかなか難しいでしょうが、年に数回だけでも、誕生日やお祝いの会などに食卓を囲む機会を作ることが大切だと思います。そこで子どもの悩みを一緒に考えることで親も勉強し、成長していくものではないでしょうか。ぶつかり合いや、言い合いを恐れず、キャッチボールをすることを大切にしたい。ドラマのなかでも、食卓のシーンを大切にすることで、皆さんの生活の指標となれるよう、ドラマ作りを続けてまいります。



『渡る世間は鬼ばかり』の食卓シーン

時代の変化に伴い食卓の彩りは変化したが、変わらず描かれるのは、父親の叱咤激励、子どもの成長など「家族の強い愛情」だ。



石井ふく子さんの代表作である、橋田壽賀子ドラマ『渡る世間は鬼ばかり』。1990年のスタートから22年にわたり放送された。2012年9月に2週連続の2時間ドラマとしてお茶の間に帰ってきた。画像提供：TBS（2012年9月放映分）



武里団地
(埼玉・春日部市)

巨大団地に
飛び込んだ学生が
作り出した新しい食卓

埼玉県春日部市にある武里団地に大学生が移り住んだ。高齢化が進む巨大団地の活性化のために大学生は食を通じた交流イベントを開催。団地に新しい食卓を作り出した。

特記以外の写真：大塚俊
取材：文：船木麻里



2012年10月の「ふれあい喫茶」には地域住民と学生が130人以上集まった



「第2回隣人まつり」

テーブルのあちこちから、もんじゃない焼きの香ばしいソースの香りが漂ってきた。

「まあ、おいしいじゃない!」「そうですか、よかったです!」

「あれ、なんか焦けていない?」「もんじゃない焼きはちょっと焦げるくらいが旨いんですよ——」

こんな高齢者と学生の和気あいあいとしたやりとりが聞こえてくる。埼玉県春日部市にある武里団地の集会所一杯に明るい声が響き、笑顔が広がった。

2012年7月に行われた「第2回隣人まつり」。団地に入居した学生が企画した地域住民との交流イベントだ。参加者は30人ほど。6〜7人でテーブルを囲み、おしゃべりしながら「焼きそば」と「もんじゃない焼き」を作った。

「もんじゃない焼きなんて食べたことないからいらない!」と敬遠していた団地住民の関口京子さん。気がつく、「今度は私がやる」とヘラを持ってもんじゃない焼きを作っ

ていた。「やってみたら意外と楽しい」と顔をほころばせ、人生初のもんじゃない焼きに舌鼓を打った。

「若い人との会話もごちそうよね!」初めて出会った人とても、食卓を挟んでワイワイガヤガヤできて最高!。そんな参加者の弾むような言葉に、準備段階から不安と心配を持ち続けていた12人の学生の緊張は、次第に解きほぐされていった。同時に、参加者に喜んでもらえたことのうれしさで、「やってよかった」という充実感がこみ上げてきた。

(写真:春日部市)



第1回隣人まつりでは、餃子を焼いて交流を深めた



もんじゃ焼きと焼きそばを作った第2回隣人まつり。若者と年配者が一つのテーブルを囲む

(写真:春日部市)

学生が団地にやってきた理由

1966年から入居が始まった武里団地。最盛期は2万人を超える入居者がいた。ただ、最近が高齢化が進み、入居者は1万人を割るほどになっている。

地元春日部市がこうした問題の対策の一つとして、UR都市機構と2011年度から取り組んでいるのが「官学連携団地活性化推進事業」。武里団地で地域貢献活動を行うことを条件に、移り住んだ学生に家賃などの半額を助成するという制度だ。2人以上のルームシェアでの入居も条件だ。制度を利用して、2011年9月に2人、2012年1月に5人の学生が入居した。

2011年9月に入居した金子康信さん(日本工業大学ものづくり環境学科4年)は入居の理由をこう語る。

一人で食事をするより
大人で食べるほうが
数段おいしい。
日本工業大学4年
金子康信さん



「アは、就職して寮生活をするときの練習にもなりますから」
2012年1月に入居した泉水俊哉さん(埼玉県立大学保健医療福祉学部3年)も、「団地から大学へは自転車で行けるし、将来は理学療法士になりたいので、高齢者と接する機会が増えれば仕事にも役立つのでは」という期待もありました」と話す。

食を通して生まれる
自然な会話がお互いの距離を
近づけてくれます。
埼玉県立大学3年
泉水俊哉さん



手探りの地域貢献活動

大学の活動で平日は早朝から夜遅くまで団地にいない生活の中、団地の高齢者に喜んでもらうために何ができるのか。金子さんが通っている日本工業大学の建築学科・佐々木誠准教授に相談した結果、決めたアイデアが食を絡めた交流イベントの開催だ。

分かりませんでした」と振り返る。



(写真2点とも:春日部市)



隣人まつりだけでなく、理学療法を学ぶ学生が体操を指導するイベントも開催

金子さん自身、「食事は一人で食べるより、ルームシェアしている友だちも含めて大人数で食べるほうが数段おいしい」と感じていた。それなら、高齢者と一緒に食卓を囲むイベントをやれば交流が深まるのではないかと考え「隣人まつり」を企画した。

1回目は2012年1月に実施した。メニューは「餃子」。学生と高齢者が一緒になって餃子の皮で具を包む。慣れない手つきで皮と格闘する学生に、高齢者が「こうするんだよ」と教えたり、小籠包みたいなオリジナルの包み方を披露したりした。でき上がった餃子を食べるころには会話も弾んだ。

「第2回隣人まつり」には、1月に入居した泉水さんら3人も加わった。5人の日程調整がつかず、準備や話し合いは難航したが、メニューを「焼きそば」と「もんじゃ焼き」に決め、武里団地自治会からもアドバイスを受けながらプランを詰めていった。

若者たちからパワーを
もらうことができました。
団地にお住まいの
宮澤八重子さん



若者が頑張る姿を見て
とても感動しました。
団地にお住まいの
関口京子さん





イベントが終わるころには、すっかり仲良くなっている



最初は緊張しましたが、やさしい言葉をかけてもらって、気持ちが楽になりました。

埼玉県立大学3年
松下耕平さん



イベントを通じて顔見知りも増える



とってもうれしい。私たちもパワーをもらえるし、若い人も人生の先輩から、何か得るものもあるかもしれませんね」と満足そう。学生たちも学ぶものは大きかったようだ。入居当時は地域貢献活動に対する義務感から緊張して構えていた学生たち。2回の「隣人まつり」で活動に対する意識も変わった。

「あなたたち若い人がいるだけでいい」という言葉をもらって、肩の荷が下りたというか、すごくラクになりました(埼玉県立大学3年 松下耕平さん)。「高齢者に何かしてあげようと緊張するのはなく、食を通して自然に生まれる会話から、お互いを知り、交流を深められることが分かりました(泉水さん)。「今度ウチに食べにおいでよ」と言われてうれしかった。こんなところから交流がもつと広まるいいですね(金子さん)。学生たちは今、次のイベントに向けて、新たな試行錯誤を始めたところだ。地域の住民にも変化が起きた。学生が企画したこの「隣人まつり」をきっかけに、自分たちもコミュニケーション活動を開始したのだ。毎週水曜日、団地の中央集会所に集まり、コーヒーやお茶を飲んだり、トーストを食べたりしながら、気軽にしゃべりする「ふれあい喫茶」というイベントを自ら立

高齢者の方々の好みに合わせるため、何度も試食を繰り返しました。
埼玉県立大学3年
原田翔平さん



第1回はあまり宣伝をしなかった反省から、ポスターを作成。自治会の協力で500枚ほど張った。すると前売りチケット30枚は即完売した。ただ、5人の一番の不安は、「もんじゃ焼きが高齢者に受け入れられるのか、高齢者の皆さんが本当に楽しんでくれるのだろうか。自分たちの気合が空回りしていないだろうか」ということ。そこで、休日に5人で団地内を歩き、高齢者に話しかけて暮らしぶりを聞いたり、開催1週間前に数人の高齢者を招いての試食会



最初はぎこちない会話も、食事を通じて自然体に

も開いたりした。「自分たちはおいしいと思う味付けも、高齢の方にはしょっぱいと感じるということも教えてもらいました(埼玉県立大学3年 原田翔平さん)。その情報を生かすため部屋で何度も試作品を作っては食べ、味見を繰り返してレシピを決めた。若い人がいるだけで楽しい。苦労と試行錯誤の甲斐あって、「第2回隣人まつり」は大成功。参加者の宮澤八重子さんは「若者と食を通して交流が深められるのは

ち上げたのである。

4月に開催して以来、参加者は次第に増え、「最近では100人を超えるまでになりました。チケット売りから料理まで住民だけでワイワイやっています」と石塚凱祥自治会長は笑顔で話す。「武里団地の住民ではないけど誘われて来たら楽しくて。今は毎週、電車通いです。新しい友だちもたくさんできました」と喜ぶ80代の女性もいる。「ふれあい喫茶」には地域住民だけでなく、近隣大学の学生も授業の一環として参加することがあります(広がつて)。

「隣人まつり」をきっかけに、住民同士の交流が活発になりました。
自治会長の石塚凱祥さん



食のつながりが生み出す 新しい団地再生のかたち

東京都日野市で、古くなった団地を再生した賃貸住宅「たまむすびテラス」では、若者、家族、高齢者など様々な世代が暮らしている。ここでは食を通じたイベントなどによって世代間の交流も実現している。



ゆいま〜る多摩平の森

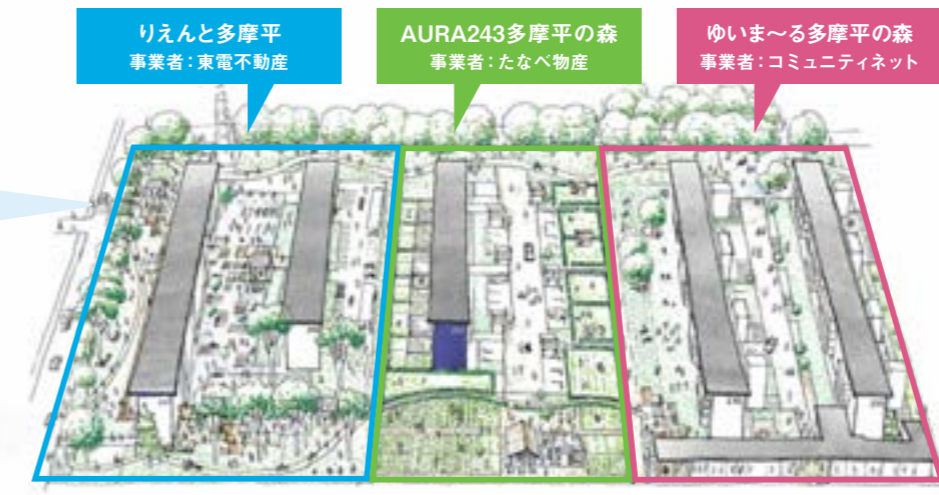
地元の高齢者も集う
安心の住まい



※1 建物に併設された「ゆいま〜る食堂」は住民の憩いの場。入居者のクリスマスパーティーやお茶会なども開催される

「たまむすびテラス」もその一つ。入居者のターゲットが異なる3つの賃貸住宅で構成する。民間企業がそれぞれ既存の住棟を借り受け、古い建物を生かして、新たな賃貸住宅に生まれ変わらせた。「ゆいま〜る多摩平の森」は高齢者向けの賃貸住宅(全63戸)。「りえんと多摩平」は若者向けの団地型シェアハウス(全142室)だ。「AURA243 多摩平の森」(全24戸)はファミリー層、アクティブシニア向けの菜園付き共同住宅である。

3つの住まいに共通しているのは、それぞれ食を通じたコミュニケーションが図られていること。例えば「ゆいま〜る多摩平の森」は、「ゆいま〜る食堂」を1階に併設。入居者や近隣住民の憩いの場



提供: (株)リビタ

りえんと多摩平 若者の活気にあふれた シェアハウス



※3 入居者が集まり、1階にある大型キッチンで料理をしてパーティーを開くなど、シェアハウスならではの交流がある

AURA243 多摩平の森

土と触れ合い
収穫を楽しむ生活



※4 収穫した野菜などを持ち寄り、AURAの入居者はもちろん他の棟の住民も参加してパーベキューなどを楽しむイベントを開催した

る。その横には大きなテーブルが並び共用ラウンジがあり、外部には広いウッドデッキテラスが設けられている。入居者はこうした設備を使って一緒に料理をしたり屋外パーティーを開いたり、シェアハウスならではの生活を満喫している。

たまむすびテラスの入居者同士の交流も盛んだ。昨年暮れには、餅つき大会が開かれ会場は子どもから高齢者まで、多くの世代の笑顔であふれた。

高木計宏さん、知枝子さん夫妻は最近、住み慣れた日野市内の一軒家売って「ゆいま〜る多摩平の森」に引っ越してきた。「基本的に自炊をしていますが、面倒なときや来客があったときは食堂を使っています。行けば必ず誰かいるから寂しくないし、自然とおしゃべりが始まって楽しいですね(高木計宏さん、知枝子さんご夫妻)。

入居者のお茶会などにも利用されている。「食べたり飲んだりすると、自然と会話が弾みます。イベントをきっかけに入居者同士の交流がより深まります」(「ゆいま〜る多摩平の森」ハウス長・榎引順子さん)。

し菜園「ひだまりファーム」(45区画)もあり、野菜作りやガーデニングを楽しむファミリーの姿があちこちで見られる。

また、屋外のイベントスペースにはBBQグリルや流し台が備え付けられており、新入居者のウェルカムパーティーや、収穫を祝うパーベキューパーティーなど、様々な催しに使われている。

「若い人たちに、私たちが餅のつき方や丸め方を、こうやるのよとやってみせると、見よう見まねで覚えてくれて。一緒に作ったお餅のおいしかったこと!」(「ゆいま〜る多摩平の森」に住む吉崎安喜子さんは笑顔でこう話す。

「AURA243 多摩平の森」の1階住居には専有庭が設けられている。入居者以外も利用できる貸し庭「コロニーガーデン」や、貸

「イベントに集った世代の笑顔」

一方、20代〜30代を中心に若者が多く入居する「りえんと多摩平」の1階には広い共同キッチンがあ

餅つき大会だけでなく、どんど焼き、桜まつり、お月見など、食を通じた様々なイベントが季節に合わせて常に開催される。こうした住民同士の世代を超えた交流が地域の絆を一層深めている。



※1



※3



※4



※3



最新の電化製品に囲まれた昭和の食卓

当時の主流だった人研ぎの流し台



DKは憧れの新しいライフスタイル

DKの中心は特製のテーブル



台所と食堂を合わせることによって、スペース効率と合理性・快適性のアップを両立した住まいが生まれた



SCENE 3

時代とともに変わるキッチン

ライフスタイルの変化に伴って住宅の中で大きく変化しているのがキッチン。昔、住宅の片隅に追いやられていた台所が、ライフスタイルの変化とともに、DK(ダイニングキッチン)となり、生活の中心、家族のコミュニティの中心になった。

part 1

DKの誕生 日本住宅公団が先導した食卓革命

食卓を通じて家族のつながりを生み出してきたDK。DKという表現は日本独自の呼び方で、UR都市機構の前身である日本住宅公団が考案したものだ。公団が先導し、その後全国に広まった。昭和の食卓革命から55年。DKの誕生を、当時の姿をしるばる写真や間取りで振り返る。

ピカピカの流し台のある明るい台所

台所の側にも課題があった。家事は家庭の中で下働きとして扱われ、台所は北側の隅っこに追いやられていたのである。設計担当者は、台所を南側の開かれた場所に移すことによって、家事を生活の表舞台に出し、モダンな生活の実現、女性の地位の向上に寄与したいと考えた。



量産に成功したステンレス流し台

流し台が人研ぎからステンレスに変わって、大きく変化したキッチンは、その後も換気扇を付け加えるなど様々な進化を続け、使い勝手を向上させていった

多くの家庭が「ちび台」を囲んで食事をした



間取りの呼び方でいまやすっかりおなじみのDK(ダイニングキッチン)。英語のようだが海外では通じない。食事室を意味する「ダイニングルーム」と、台所を意味する「キッチン」という2つの英語を組み合わせた和製英語だ。生まれは1957年(昭和32年)。「もはや戦後ではない」と経済白書が新しい時代の幕開けを宣言した、わずか1年後のこと。設立間もない日本住宅公団(現UR都市機構)は、従来の公営住宅の標準的な間取りよりおよそ1坪(約3.3㎡)広い13坪での間取りのレイアウトに知恵を絞っていた。解決すべき課題の一つが食事と就寝の場を分ける「食寝分離」。当時、食事には「ちび台」という座卓を用いるのが一般的だった。食事の時は「ちび台」を使い、床に就く際は畳んで布団を敷いた。テーブルで食事をするという新たなライフスタイルを提案することで生活の質を向上したい——公団の設計担当者はこう考えたのである。

限られたスペースの中で、食寝分離と台所の快適性のアップを両立するために公団が出した答えがDKだった。そして、DKの利用法を定着させるため、公団オリジナルのテーブルを置いた。狙いは当たり、DKでテーブルを囲む食事が、憧れのライフスタイルとなり、全国に普及していった。

ステンレスの流し台を量産

当時、流し台には主に「人研ぎ」と呼ばれた人造大理石の研ぎ出し仕上げのものが用いられていた。ただ、変色やひび割れの問題を抱え、見栄えはあまり良くない。家族団らんの場となったDKの流し台としてマッチしているわけではなかった。

この問題に対する公団の答えがステンレス製の流し台の導入だった。変色やひび割れの問題もなく、ピカピカで台所が明るいイメージになる。ただ、当時、流し台を作るにはステンレス板を溶接で継ぎ合わ

せる必要があった。これでは人手がかかって量産できず、コストが高つく。プレス機でシンクを成型すれば、コストは引き下げられるのだが、工場ですと力の加わる部分で、どうしても割れてしまう。――。昼夜を問わず試行錯誤を重ねるうちに、ステンレス板の表面に微細な凹凸があると、プレス加工の時に割れてしまうことが判明した。そこで表面を丹念に研磨してプレスすると、見事に1枚のステンレス板がシンクの形に成型できた。

ピカピカの流し台の導入で、DKのイメージはさらに上昇した。そして高度成長時代を迎え、DKには電気冷蔵庫、電気炊飯器、トースター、ミキサーなど次々と、新しい家電製品が並んだ。自慢の家電製品がそろった明るいDKに家族が集い、ダイニングテーブルを囲んで食事をする。昭和の食卓がこうして誕生した。

※Beforeの写真・レイアウトは、改装前の一例です

BEFORE

オープンキッチン

リビングからもキッチン
の様子が見えてしまう



SCENE 3

多様化する
キッチンスタイル

NEW

アイランドキッチン

キッチンをリビングダイニング(LD)の中に島のように配置している

クローズドキッチン



ダイニング(D)とキッチン(K)が分かれている

対面式キッチン



カウンターが付いた対面式キッチン。写真のような、脇の壁のないタイプが人気を集めている

バックカウンターキッチン



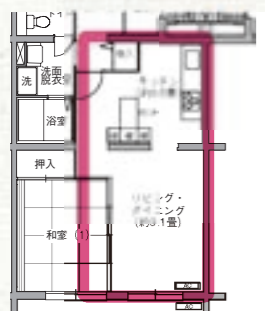
オープンキッチンにバックカウンターが付いている

AFTER 4

バックカウンターキッチン



バックカウンターを設けることで、子どもと一緒に料理したりすることもできる

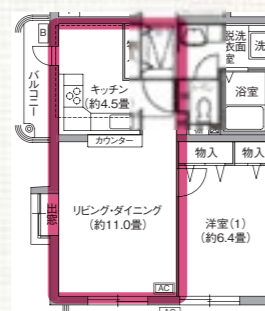


AFTER 3

対面 + L字型キッチン



L字型のキッチン。流し台の前にカウンターを設けている

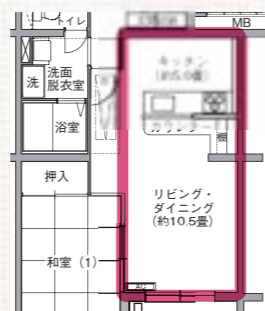


AFTER 2

対面+ローカウンターキッチン



子供に合わせて、カウンターの高さを低くしている

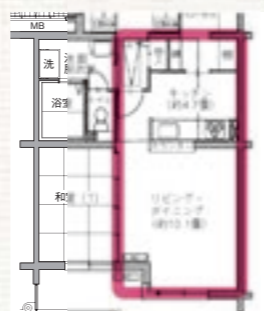


AFTER 1

対面 +I字型キッチン



カウンターを設けたI字型のキッチン



part 3

URのリニューアル
画一的なDKを様々なタイプに

従来、団地の間取りといえば、画一的なものだったが、最近では様々なタイプのDKに改装するケースが出てきている。子育てを意識するなど多様なニーズに応えるためだ。

キッチンの多様化は新築住戸ばかりではない。既存住戸でも新しいタイプのキッチンタイプにリニューアルするケースが出てきている。例えば、埼玉県鶴ヶ島市の「かわつるグリーンタウン松ヶ丘」では、入居募集前にキッチンをリニューアルすることで団地内で様々なキッチンスタイルを選べるようにしている。従来のオープンキッチンにバックカウンターを新たに設けたり、対面式のカウンターキッチンを採用することで、入居者は自分のライフスタイルに合ったキッチンを選べる仕組みだ。この団地で間取りやキッチンの設計を担当しているのは、実際に子育て中の女性職員たち。多様なニーズの中から、特に子育ての

part 2

進化するDK
ライフスタイルに合わせて多様化

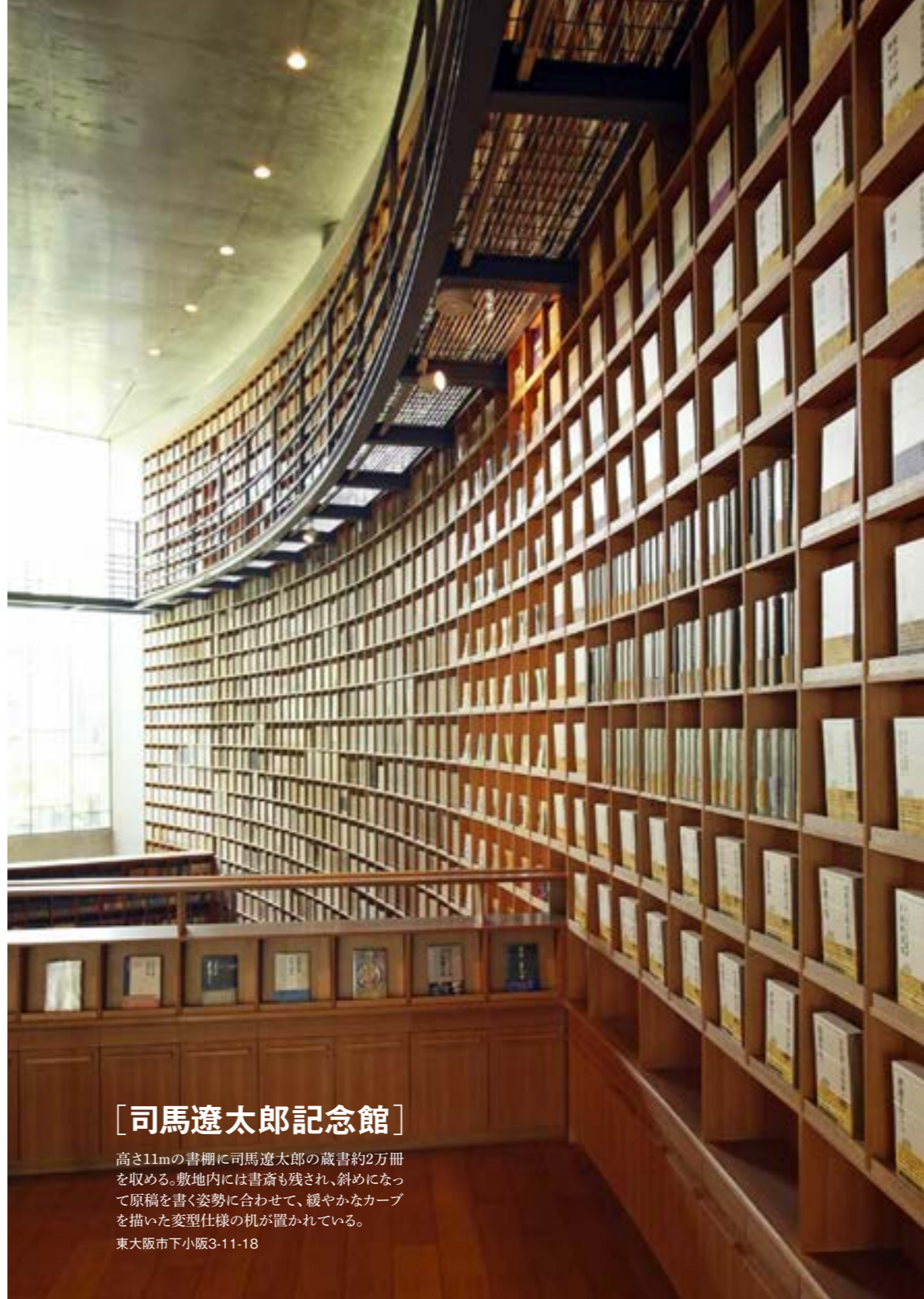
DKが家族の団らんの舞台になって50年以上。その間、日本人のライフスタイルや住環境は大きく変わり、多様化した。それに伴って、DKにも様々なスタイルが生まれた。1970年代なかば、人々のライフスタイルが大きく変わり多様化するのに伴い、DKも大きく進化を遂げるようになった。その代表的なものが対面式キッチン。キッチンで調理中、顔を上げればダイニングの様子が見えるレイアウトだ。「キッチンの様子は見られたくない」でも家族とのコミュニケーションは大切にしたい」という2つの要望を満たしたこの対面式キッチンは、現在提供される多くの新築住宅で取り入れられている。一方、クローズドキッチンも人気がある。そこには「キッチンの様子を見られたくない」というユーザの思いがうかがえる。台所を常に整理整頓してきれいに保つておくことは、主婦にとってかなりの負担なのかもしれない。バックカウンターキッチンはオープンキッチンの後ろにカウンターを付けたレイアウトだ。ダイニングとの一体感を残しつつキッチンの様子をある程度隠すことができる。また広い作業スペースが確保されるので、夫婦や親子で一緒に料理するには好都合だ。最新タイプではアイランドキッチンがある。大胆にキッチンセットを部屋の真ん中へ配置したレイアウトだ。家族がキッチンを囲んで料理を楽しんだり、ホームパーティーの舞台にもなったりするので、食を通じた団らんと重視する家庭にはぴったりと言えるだろう。

司馬遼太郎

(1923~1996)

「大阪市・東大阪市」 司馬文学の軌跡をたどる

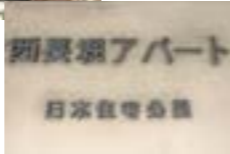
文：川岸徹 写真：大腰和則



「司馬遼太郎記念館」

高さ11mの書棚に司馬遼太郎の蔵書約2万冊を収める。敷地内には書齋も残され、斜めになって原稿を書く姿勢に合わせて、緩やかなカーブを描いた変型仕様の机が置かれている。
東大阪市下小阪3-11-18

「西長堀団地」



大阪市西区
北堀江4-2-40

私は、大阪で仕事をしていた。堀江の西長堀という川の多い町に十階建てのアパートがあり、その十階にいた。時代小説風に説明すると、このアパートの敷地は、むかし土佐藩の蔵屋敷があった敷地の角に、藩邸を守護するお稲荷さんがあり……(略)
〔歴史と小説〕
(集英社)

「土佐稲荷神社」



大阪市西区北堀江4-9-7

司馬遼太郎が住んだ西長堀団地の10階から(写真右)。眼下には土佐稲荷神社が見える。商人たちは神社を「土佐ノ稲荷」と呼び、親しんだという。

「桜井」



東大阪市小阪本町2-13-15

司馬遼太郎の好みは「きつねうどん」「きつねうどん」に気が入ると、同じものばかりを注文するんです。私が女中だった頃、毎日カマンベールチーズを食べていたこともありましてと女将さん。



「適塾」



大阪市中央区北浜3-3-8

船場北浜、御堂筋のすぐ裏手に、近代的なビルに囲まれ今も残る町家風のたたずまい、緒方洪庵の適塾は、昭和二十年の大空襲にも奇跡的に焼失を免れ、往時の姿をとどめている。
〔司馬遼太郎の日本史探訪〕
(角川書店)

「大阪城公園駅」



大阪市中央区大阪城3

ただ、思うべきである。とくに春、この駅に立ち、風に吹かれる芽の香に包まれるとき、ひそかに、石垣をとりまく樹々の発しつづける多様な信号を感応すべきであろう。
駅開業に寄せて司馬遼太郎が書いた詩(同駅展示の陶板より)



大阪中の古書店から、坂本竜馬に関する本が一日にして消えた……。累計約2400万部の売り上げを誇る『竜馬がゆく』を筆頭に、幾多のベストセラーを残した文豪・司馬遼太郎。本を愛し、執筆の際には、古書店にトラックで乗り付け、書物を片っ端から買い求めたという。

司馬が1964年から32年間を過ごした終の棲家の敷地内に建つ「司馬遼太郎記念館」(東大阪市小阪)を訪れると、そんな逸話が少しも大袈裟なものではないと感じる。床から天井まで、埋め尽くされた本。これらはすべて司馬の蔵書だったもので、総数は約2万冊にもなる。

「司馬さんの蔵書が散逸してしまうのが嫌で、なんとかまとめて残したいと考えていました。すると約8400件にも及ぶ個人、企業からの寄付が集まり、こうして記念館が設立できたわけです」と館長の上村洋行さん。

人々に愛される司馬遼太郎。その人柄は、記念館の近くにあるうどん店「桜井」でも垣間見えた。かつて司馬遼太郎の元で女

中を勤めていたという女将さんがこう話す。「司馬先生は店の場所探しまで手伝ってくれたんですよ。そのうえ開店祝いに手書きの『のれん』をいただいて。人を愛し、そして大阪という街を生業愛した司馬遼太郎。1983年、住まいの近くに大阪城公園駅が開業した際には、お祝いとして詩を贈った。その詩は陶板に写され、現在も駅改札口を飾っている。

ここに移り住む以前、司馬は大阪市西長堀の「西長堀団地」で暮らしていた。若き日の司馬は、ここを基点に取材に励んだ。江戸時代の蘭学者・緒方洪庵が開いた「適塾」、団地の隣に立つ「土佐稲荷神社」など、数々の史跡を訪ね歩いた。土佐藩出身の志士、坂本竜馬を主人公にした『竜馬がゆく』が生まれたのは、この団地時代のことである。

さらに同じ頃、『臯の城』が第42回直木賞を受賞……。後に司馬は西長堀団地について、こう振り返る。「不満は何もなかった。ただ、本が増え過ぎて、引越すしかなかった」と。

宮城県牡鹿郡女川町・東松島市

復興まちづくり事業が着工



着工式での掘入れ(女川町)



着工式での掘入れ(東松島市)



住宅の集団移転計画に基づく模型(東松島市)

UR都市機構は、2011年3月に発生した東日本大震災の被災した市町村において復興まちづくり支援を進めています。

宮城県牡鹿郡女川町および同県東松島市では、復興事業の建設工事が始まりました。それに先立ち女川町では、9月29日に「女川町復興まちづくり事業着工式」を、東松島市では10月25日に「東松島市復興まちづくり整備事業着工式」を開催。いずれも100人以上の関係者が参加しました。

女川町、東松島市では地震により津波が襲いました。女川町では、建物の7割が全壊または半壊などの被害。死亡者・行方不明者は約830人。東松島市では市街地の約65%が浸水し、死亡者・

行方不明者は1000人を超える大災害となりました。

当機構は被災した18の各市町村と協定などを結び、女川町では町中心部および離半島部において、土地区画整理や住宅の集団移転の促進、災害公営住宅の建設、漁港施設機能の強化などを実施します。東松島市では、約91ヘクタールの野蒜北部丘陵地区や約22ヘクタールの東矢本駅北地区の土地区画整理などを全面的に支援し、JR仙石線の日も早い復興を目指します。

須田善明女川町長は着工式の挨拶で、「いよいよ復興まちづくり事業の着工です。1000年に一度の災害というなら、私たちは1000年に一度のまちづくりを成し遂げ、将来に引き継げるまちをつくって

いきます」と表明しました。

また、阿部秀保東松島市長は着工式の挨拶で「後世の東松島市に問われる事業ばかりですが、一つひとつ着実に乗り越え、一人ひとりが新たな生活の拠点として再び笑顔で暮らせるようになるまで引き続き努力していきたい」と表明しました。

UR都市機構は、これまで培った経験とノウハウを最大限に発揮し、また新しくCM(コンストラクションマネジメント)方式を活用した工事発注を行うなど地元の建設業者などを含めた民間の力をお借りして、住民の方々が一日も早く元の暮らしを取り戻せるよう、組織を挙げて復興事業に取り組んでまいります。

<http://www.ur-net.go.jp/saigai/>

「UR PRESS」Web版も
お楽しみください!



内容充実の「UR PRESS」Webサイト。特集の巻頭インタビューや記事のオリジナル動画なども掲載しています。ぜひサイトもご覧ください。

UR PRESS 検索

<http://www.ur-net.go.jp/publication/web-urpress/>

URのツイッター

UR都市機構のツイッターでは、イベント、キャンペーン、募集情報などをタイムリーに発信しています。ぜひアクセスしてみてください。

http://twitter.com/UR_TOSHIKIKOU

編集後記

「若い人が一緒に居てくれるだけでいい」。今回取材した武里団地(埼玉・春日部市)で、学生さんとの食を通じた交流について、こうお話ししてくださった、団地にお住まいの関口京子さん。誰かのために料理する気持ちや、同じものを食べて同じ時間を過ごすことの尊さを教えていただきました。

本号のテーマは「食」です。記事ではUR都市機構が作ってきたキッチンの変遷についてもご紹介しています。撮影を行った集合住宅歴史館(東京・八王子市)では、昭和30年代の「公団住宅」のほか、日本で初めて建設された本格的なRC(鉄筋コンクリート)造の集合住宅などが展示されています。一歩足を踏み入ると、子どもの頃祖父の家に行った時のような気持ちになり、台所に行けば誰かと話ができたと懐かしく思い出しました。

私たちが提供する住空間で、皆さまがご家族や地域の方々とながりを深めていただければ幸いです。

タテのヒント

- 1 両親
- 2 2で割り切れる数字
- 4 秋は〇〇〇親しむの侯
- 5 寒い時に合う温めた酒
- 7 春夏秋冬
- 9 ジャラジャラする、お金
- 11 力士の締めこみ
- 12 海のミルクとも言う冬が旬の貝
- 13 色々な寒さ対策グッズ
- 15 鳥が羽ばたかせるもの
- 16 風呂吹きや、おろしに使う根菜
- 17 受験勉強のパワーの源になる食事
- 20 勇ましい姿
- 21 鷹の爪だけの「〇〇〇唐辛子」

ヨコのヒント

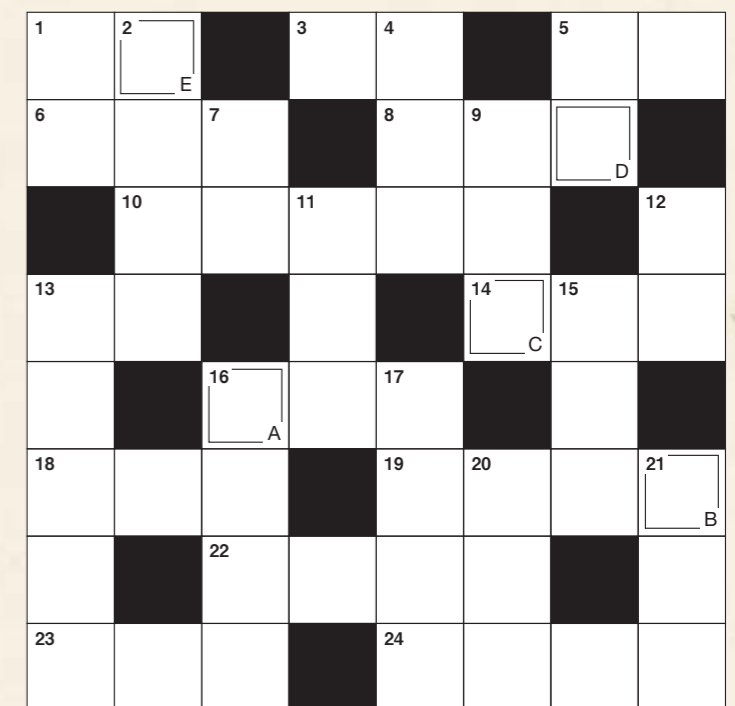
- 1 てっちりや、てっさにする冬の魚
- 3 平和の象徴と言われる鳥
- 5 寒い時期が旬のズワイやタラバってなに?
- 6 寒風よけに被る
- 8 飲み過ぎに効くと言う漢方の一つ
- 10 どこからともなくスースー入って来る
- 13 犬も歩けば当たる
- 14 三日坊主に終わりやすい手記
- 16 投手が戦う相手
- 18 マイホームパパが大事にしているもの
- 19 メインの料理
- 22 冬が来たら終わる山の彩り
- 23 愚かしい質問
- 24 「ハークション!」風邪かな?

プレゼント付き CROSSWORD PUZZLE

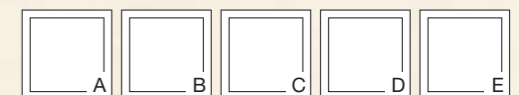
[クロスワードパズル]

クロスワードパズルの解答をアンケートはがきに記入して応募ください。
抽選で10名の方に石井ふく子さんの
著書『ありがとう またね...』をプレゼントいたします。

マジックスタジオ=作



Answer



30号の解答

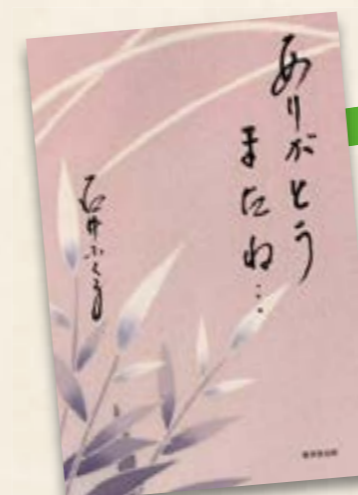
A コ B ソ C ダ D テ

テ	キ	シ	ヨ	タ	イ	コ
ツ	リ	ヤ	シ	キ	ウ	
ド		ツ	ク	エ	ト	ゲ
ウ	カ	イ	フ	ウ	リ	ン
	イ	ン	シ	フ	イ	
ハ	ダ		シ	ユ	ゴ	フ
ナ	ン	ド		カ	エ	ウ
ビ		ア	バ	タ	ソ	バ

応募要項

UR PRESS vol.31「読者プレゼント」への応募は、本誌に同封の応募はがきにクロスワードパズルの解答と必要事項をご記入のうえ郵送ください。

応募の締め切りは
2013年1月31日(当日消印有効)です。
当選者の発表は賞品の発送をもって代えさせていただきます。



Present

抽選で
10名様に
プレゼント!

石井ふく子さん著
『ありがとう またね...』
(廣済堂出版)